【参考作品　四年生】命の大切さ

【はじめ】工夫した書き出し、この本を選んだ理由・きっかけ

「なくな、生きているものはみんなしぬ。」これは、ゆうたのかっていた金魚が動かなくなり、泣いているゆうたにお父さんが言った言葉です。ぼくは、読み終えたとき、家でかっているカメが生きているか、思わず確かめに向かってしまいました。ぼくは、生き物が大好きです。家でもカメをかっています。本の表紙に、カタツムリをかわいがっている男の子がえがかれていたので、読んでみました。読み進めていくと、思ったより悲しいお話でした。

【なか①】お話のあらすじ＆チョッピリ感想

金魚が死んでそれから間もなく、ゆうたのお父さんが、台所でばったりたおれて三日後になくなってしまったのです。泣いている弟のりょうへいに、ゆうたは、「なくな。生きているものはみんなしぬ。」と言いながら、ゆうたの目からもなみだが流れ落ちました。金魚が死んで悲しんでいたのに、お父さんも死んでしまい、ゆうたは悲しくてつらかったと思います。ぼくも、生きているものはみんな死ぬことは、わかっています。けれど、わかっていても、実際に死んでしまうことなんて考えたこともありません。ぼくだったら、ものすごく悲しくて何も考えられなくなってしまうと思います。そんなゆうたは、「お父さんの水そう」で、カタツムリをかいます。名前はデンデ。とてもすてきな名前です。

【なか②】イチバン「心にのこった部分・山場」についての感想

ぼくが、一番心にのこった場面は、大切にかっていたデンデのカラが、くしゃっとつぶれて動かなくなってしまったところです。ゆうたは、セロハンテープでカラをくっつけました。ぼくは、なんとしても治してあげたいゆうたの気持ちが伝わってきて、治ってくれという気持ちと、そんなことをしても死んでしまうのではないかという気持ちで、ドキドキしました。よく日、デンデは死んでしまいました。ぼくは、やっぱりなぁと思ったけれど、悲しい気持ちになりました。泣きそうなゆうたの頭の中では、お父さんの言葉がくり返しひびいていました。そして、泣きたいのをこらえて、弟にお墓を作ろうと声をかけました。ゆうたは、悲しみを乗り越えて、生きているものをより大切に思ったはずです。ぼくも、命を大切にしたいと思いました。

【結論・まとめ】本を読む前とかわった「自分の考え・ものの見方」

ぼくは、かっているカメに、エサをあげたり水をかえたりしていますが、自分のことをゆう先して、後回しにすることがあります。今まで以上に世話をして、大切にかっていきたいです。それから家族も大切にしたいです。サッカーを教えてくれるお父さん。いつも、準備を手伝ってくれるお母さん。当たり前のような生活をしているけれど、とても大切な日を過ごしていると思います。いつもは言っていないけれど、感しゃの気持ちを言葉で伝えたいと思いました。それから、いつもけんかをしているお姉ちゃん。今より少しだけやさしくしてあげたいです。

（廣越たかし『ゆうたの小さなカタツムリ』）